



見るものではなくて読むもの

園長 山中 文

先日、本園では、保護者の皆様を対象にして、椋山女学園大学教育学部の磯部錦司教授にご講演をいただきました。テーマは「子どもの豊かな学びと表現 ー今、大切なことー」です。ちょうど本園では11月に「アートギャラリー」と称して、子どもたちの作品展を開催します。子どもたちの作品を見ていくにあたって、タイムリーにとってもいいお話をいただきました。

ご講演は、現在が感性の時代であることや、21世紀型能力を育てるために思考や表現の過程を重視する必要があることなどの話題から始まりました。

子どもは、2歳頃になるとぐるぐると渦巻状のなぐり描きをするようになります。そのぐるぐるの丸が閉じた丸になってくると、何らかの意味を伝えるようになってくるようです。その頃からの子どもの絵を、大人の文化からとらえてしまうのではなく、子どもの語ることからとらえましょう、というようにお話は続いていきました。

たとえば「運動会」の絵の話があがっていました。「運動会」を描いたと持ってきて、その絵がそれだけではない場合があります。運動会のことは画用紙の右3分の1くらいに描かれ、真ん中には雲梯とそれを渡っているかのようなたくさんの手が加えられており、その左横にどんぐりもいっぱい描かれている、などというようにです。そこで、「それは運動会じゃないでしょ」「なんで雲梯が出てくるの?」と問い詰めるのは、野暮というものでしょう。日時や場所を自由に移動させるというのは、この頃の子どもにとって現実的な思考なのです。子どもがその絵について語ってくれたら、その頃の楽しかったいくつもの思い出が子どもの中にあることが見えるかもしれません。

〇〇ランドに行った時の絵が画用紙の下3分の1くらいのスペースにしか描けてなくて、急いで大人が手直して、〇〇ランドの正面で写真を撮ったかのような構図の絵ができあがったというお話もありました。そのこどもは、〇〇ランドで遊んだいろいろな思い出を描きたくて、それを残り3分の2に描きあぐねていたのかもしれません。このような大人の絵の修正は、子どもの創造をととてもこわすものになってしまったようです。

一つひとつの子どもの作品には子どもなりの意味があって、その育ちには感心させられます。3歳ではそれぞれに個性的な表現が、4歳では物語性が出てくる表現が、5歳では集団でひとつのものをつくるという表現がと、それぞれの段階が現れてくることも頼もしいものです。大人の感覚や作品の見栄えで修正を施すようなことは行わず、表現したいと思う気持ちを後押ししていくように、支援・指導を考えていきたいですね。

ご講演では、「子どもの表現（子どもの育ち）を10倍楽しむ」ための7つの方法が提案されていました。ぜひご家庭でも試してみてください。①ありのままに感じてみる、②上手い下手では決してみない、③教科書の発達過程で見るのではなくその子の中でみる、④わかる線や形から想像してみる、⑤タイトルや先生のコメントから鑑賞してみる、⑥「お話きかせて」と子どもに尋ねてみる、⑦子どもの生活との関わりから読んでみる、です。最後におっしゃった「子どもの絵は見るものではなく、読むもの」というのは、まさにこの7つを集約したことかと思えます。子どもたちが何を語るか聞いてみたい秋ですね。

